

岡谷市議会 総務委員会 行政視察報告

【総体事項】

1. 視察日程：平成23年11月14日（月）～17日（木）
2. 調査事項（視察先）
 - （1）日本一通いたい、通わせたい学校施策について（福岡県 古賀市）
 - （2）炭都であった歴史を活かしたまちづくりについて（福岡県 田川市）
 - （3）ICT（情報通信技術）を活用したまちづくりについて
(佐賀県 武雄市)
 - （4）柳川ブランド推進事業について（福岡県 柳川市）
3. 視察参加委員

委員長	鮎澤	美知
副委員長	共田	武史
委員	今井	康喜
委員	武井	富美男
委員	清水	將弘
委員	山之内	寛

【視察地毎の報告】

1. 調査事項

日本一通いたい、通わせたい学校施策について（福岡県 古賀市）

人口：約58,800人 面積：約42km²

（視察事項）

古賀市は、「日本一通いたい、通わせたい学校」を目指し、「二学期制」、「中1ギャップ対策講師配置」、「小1プロブレム対策学級補助員配置事業」など「物より人への教育施策」を進めている。

2. 視察日時 平成23年11月14日（月）13：20～16：00

3. 参加者所感

- 説明して下さった学校教育課長は元校長先生で、バイタリティーに溢れ、方針、施策が順調に進展しているという「自信」がうかがえた。
- 学校2学期制は、岡谷市でも過去に実施した中学校があるが、特定の校長の意向で行なわれており、継続されなかった。長短あるものと思われる。中学校は一般的に学習指導要領に定める授業時数を確保するのに苦勞しており、その点には適しているが、高校受験制度がある限り、色々と困難なこともあると感じた。
- 古賀市の学校教育課長は、県教委の指導主事、校長職にあった方であり、このことは学校教育行政を担当するものとしてはベストの人材であると思う。学校教育には何が必要か、それは本人も言っているように、質・量共に「人」の確保であり、そのことがよく理解されていると思った。
- 最近の教育現場は、特に教職員に過重な負担がかかり、いじめなどを誘引する一因ともなっている。一方で少人数学級に打開の方途が模索されているが、二学期制も有効と思われる。評価する教師にとって半年の長いスパンは、煩雑で余計な労力から解放され、一人ひとりの児童にあわせた対応が可能となるし、また評価される児童の側も、教師への信頼感が増す。反面、よほど周到な準備、方針を確立しながら、断固とした決意のもとに推進しないと、デメリットが浮上して、他市の実践例では三学期制への回帰もみられるという。教師に教育に専念できる時間と、精神的なゆとりを保障するため、二学期制の採用について、当市も研究する必要があると思われる。
- 視察した舞の里小学校は採光が豊かで、教室と廊下の仕切りがなく、オープンなところがよい。教員、児童の皆さんは、明るく礼儀正しかった。
- 特に「のびのびとした明るい子どもたち」が印象的であった。
- 実体験、地域との協同など素晴らしい実践が多くあったが、国語力（読書）向上についての取り組みは注目に値する。携帯電話、ゲーム機などが低学年にも普及する中で、他人と対面し、直接かかわる中での人格形成が叫ばれている。

読解力はそのまま豊かな人間性のバロメーターになりうる。廊下のいたるところに全員の読書感想が掲示されていた。当市も読み聞かせ、朝読などに力を入れているが、それらを検証する仕組みづくりに成功しているか、活かされているかが課題と考える。

【視察地毎の報告】

1. 調査事項

炭都であった歴史を活かしたまちづくりについて（福岡県 田川市）

人口：約51,000人 面積：約55km²

（視察事項）

炭鉱節の発祥の地で知られる田川市は、筑豊最大の炭都であった歴史を活かして、「炭鉱節まつり」の開催や「ボタ山カレー給食」などの事業に取り組み、さらに世界記憶遺産に登録された「山本作兵衛氏の記録画」等を活用して滞在型の教育観光都市を目指している。

2. 視察日時 平成23年11月15日（火）9：00～11：30

3. 参加者所感

- 昭和45年に三井田川鉱業所が閉山し、田川の石炭産業はその歴史に幕を閉じたが、石炭記念公園には、石炭歴史博物館としてしっかりその資料を保存・展示しており、また建物の外には、2本の大煙突と竪坑櫓がそびえたっており感動した。
- 岡谷市の製糸業は、関連遺産の規模が小さく、世界遺産登録などは困難と感じた。近代化産業遺産群でまちづくりをするしかないと感じた。
- 筑豊炭田の一翼を担っていた三井田川鉱業所であるが、経済発展に伴う産業構造の転換は、この経済体制では避けて通れない事象であり、企業城下町の宿命ともいえる。しかしながら、田川市はこれら炭鉱産業遺産を基盤に、新たな産業を見出そうとしており、その姿は立派である。
- 石炭歴史博物館は、見学児童や観光客で賑わい、外には大型観光バスが停まるなど活況を呈していた。岡谷市も何か思い切ったことをしない限り、活性化は難しいのではないかと感じた。
- 旧三井田川鉱業所竪坑櫓と二本煙突は国登録文化財、近代産業遺産に認定されている。100年の前に建設されたとはとても思えぬほどの壮大、堅固たるものであった。
- 観光客も非常に多く、館長以下職員も熱心で活気に満ちていた。
- 糸都岡谷も炭都田川をお手本に、蚕糸博物館を中心に活性化に向けての新たなプロジェクトを立ち上げたらよいと思った。
- 日本近代化の原動力となった舞台がここにもあった。殖産興業、工業・技術立国への確かな証拠がここにはある。この点では、岡谷市の糸都も引けをとらない自負がある。蚕糸博物館の今後が問われる中、規模は到底及ばないにしても、糸都岡谷の伝統を光り輝かせ発信していく道は充分にある。質の面で負けない岡谷市なりの秀逸した施設を作る必要を強く感じた。
- 田川市と岡谷市は、ともに日本近代化の主電源（エンジン）として果たした役

割は想像するより大きい。そしてまた機械遺産認定と山本作兵衛氏の世界記憶遺産認定とが、奇しくも同時期に果たされたことも共通している。これを市の活力再生の源泉として活用しない手はない。博物館の具体的な印象については、あまりに多く重く書ききれないが、田川市と市民の意気込みは、積極的に学ぶべきだと思う。関係職員の派遣研修も含め、一度は目の当たりにしてほしいと感ずる。

- 近代化の歴史の中で、当然ながら過酷な労働があったことも同じ。石炭も蚕糸も、長時間の重労働に支えられていた。この点で両市とも哀歌を持っている。日本での最初の女性労働者によるストを経験した岡谷市。労働歌の元祖とも言うべき「地底のうた」にこめられた凄惨な落盤事故。質問には明確な答えはなかったものの、それら「負の遺産」を含めてもなお田川の誇りは高いものがあると感じる。

【視察地毎の報告】

1. 調査事項

I C T（情報通信技術）を活用したまちづくりについて（佐賀県 武雄市）

人口：約51,200人 面積：約195km²

（視察事項）

武雄市は、小学校へのタブレット型コンピューター導入やタブレット型コンピューターで図書を借りることができる「武雄市MY図書館」の実証実験、市役所ホームページをソーシャル・ネットワーキング・サービスに切り替え市民と行政のつながりの拡大を図るなど、I C Tを活用した先進的な事業を展開している。

2. 視察日時 平成23年11月16日（水）9：00～11：30

3. 参加者所感

- 平成22年に市立小にタブレット型コンピューターを採用し、最新のI C T化を取り入れた総合的な学習の時間で、子供たちが端末の活用や操作を習得していくのは、これからの時代にはあっていると思った。
- 市役所ホームページをソーシャル・ネットワーキング・サービスに移行し、市長自身が情報発信し、コミュニケーションの活性化を図っている。ソーシャルネットワークを通して、市と市民が相互に意見を交換することができるのとことで、岡谷市においても活用策を検討したらどうか。
- 武雄市は市長の迫力に度肝を抜かれた。武雄市は人口では岡谷市と全く同じ規模といってよい。図書館をはじめ、学校教育にいち早くI C Tを取り入れ、情報分野を大胆かつ広範に市政に活用している点で他の追随を許さない。タブレット型コンピューターを多量購入し、行政の骨格と血管を一挙にI T化した感がある。その効果性の普及に伴い、おおむね市民や学童、生徒の反応も良好であるらしい。
- 地元ブランド商品の本格的販売について、市長さんから思いを語っていただいたが、注目すべきはそれらの全てが、膨大な資料の収集と分析という行動力に裏付けられているということ。100% I T依存はいまだ懸念がぬぐいきれない。しかし、市長の考えの根底には、住民生活を少しでも楽にしてあげたいとの希望が垣間見え、救いである思い。今日の地方財政の危機的状況から脱出するひとつの方法であろうことは疑いがない。

【視察地毎の報告】

1. 調査事項

柳川ブランド推進事業について（福岡県 柳川市）

人口：約 71,600人 面積：約 77 km²

（視察事項）

市内を掘割が縦横に流れることから「水の都」と呼ばれる柳川市は、掘割を使った川下りなどの観光が全国的にも有名である。

柳川市という地域のイメージを活用した地域発の商品開発や観光交流を高めることにより、地域や企業の発展につなげることを目的に「柳川ブランド推進事業」に取り組んでいる。

2. 視察日時 平成23年11月17日（木）9：00～11：00

3. 参加者所感

- 市内にブランドショップのオープン、100アイテムの商品、体験農業開催など着実に成果が上がっている。もともと歴史や豊富な観光資源に恵まれており、岡谷市にはまねのできない部分がある。推進事業は5年間での取り組みとのことであり、事業終了後のことはまだ未定とのことであるが、どのような方向に進むのか注目したい。
- 「水郷柳川」は全国でも有名であり、日本の持つ伝統的な「美」のひとつに挙げられる。柳川で「柳川ブランド推進事業」が展開されているが、地域資源の掘り起こしによる地道な地域振興策が魅力的である。
- 歴史建物の保存への取り組みがあるが、岡谷市も歴史的な建物を保存し、それをまちづくりに活かす方策をもっと真剣に検討すべきと感じた。
- 官民含めた「ブランド推進協議会」を早急に設置する必要があると感じた。
- 柳川市は農林水産業と観光の結びつきを考えており、岡谷市も同様若しくは工業振興と何かを結び付けられないものか。
- 柳川市のブランド推進事業は単に産業振興・活性化だけでなく、根本には定住促進があり、多くの人に柳川に来て住んでもらいたいという願いがある。
- 「食べめせ柳川」と称してスタンプラリーで宣伝をしていたが、多くの食べ物屋が登録していた。岡谷も商工会議所、観光協会、商連等でこのような取り組みをしたらどうか。特に「うなぎ」については、「うなぎのまち岡谷」で柳川、浜松、その他全国に呼びかけて「ウナギサミット」（仮称）等を企画したらどうか。
- 話題性は高く、年間150件内外の新聞・テレビ報道があるという。担当者は、道半ばというより始まったばかりで、苦労や失敗談も多いという。また成果は自慢できるほどではなく、販売・販促とも課題は多いというが、いずれにせよ、岡谷市が情報を得て参考にできる部分は多いと考える。